

基調提案

色と形で心を伝え合うこと 表現活動としての美術教育を考える

事務局長 三嶋真人

〇はじめに

地球の温暖化が実感される6月の日々、そして長い夏。日々の生活が忙しくて、あわただしく過ぎていきますが、ちょっと立ち止まって見渡すと物の値段が上がり、主食のコメ騒動、人口が減り続けると言われ、これから先の世の中が決して明るくは無さそうと感じてしまいます。将来への漠然とした不安、格差の固定化、少子化、年齢構成の歪みと若い人への負担。社会構成の不均衡、労働年齢と年金…とにかく、未来像はどうも不安だらけ。

アメリカの大統領の行動や発言に見られる自国中心主義は他の国々を他人事のように扱うだろうし、力による物言いは話し合いで進んできた世界観を危うくしそうです。休戦になったからと言って、戦闘場面、焼け跡が無くなるわけではなく、ヨーロッパの国々の右傾政党の台頭など歴史のネジが緩んで巻き戻されていくのではないかと思います。選挙に見る国民の反応は自民党への幻想が批判に変わりつつあるように思いますが、その受け皿の拠って立つ位置が明確ではなく、不確実な時代を感じます。

電車やバス、人が集まるところでの風景が急速に変わりつつあるように思います。ほぼ全員がスマホに向かう景色…、少し前までは新聞や本、外を眺める人、おしゃべり…などがあったのに。集団という輪が解かれ、個の世界に入り込んでしまっているようです。他人への無関心、個の世界観…集団の中での存在が消え、立ち位置が見えにくい世の中になっていくのでしょうか。孤立感は自己肯定につながるのでしょうか。共感といった客観的な視点が位置づけられず、自己中心的な行動が無自覚に出てくる怖さを感じます。

〇保育、学校現場と子どもたちの日々…

コロナを境に急速にデジタル化が進み、小学校低学年からタブレットが与えられ、それをいかに使わせるかに時間がとられています。実際に体験することやモノに触れること、観察などが映像での疑似体験に代わっていきつつあります。教師側のデジタル機器の使い方に得意不得意があり、それが子どもへの指導に跳ね返っているようです。タブレットの重さで落としたりしての故障がたえないと聞きます。

子ども同士や教師との会話に決まった言葉しか出てこない「やばい」「マジ」「上手」「かわいい」等々、使用する言語の貧困化はかなり以前から言われていますが、スマホ等（line 他）の使用がその傾向に拍車をかけていると思われる。そして、それが行動にも反映しているのでしょうか、事件事故の低年齢化や校内暴力、問題行動につながっているとの報告もあります。子どものリアルな生活や家庭のことなどは言い出せないし、作文にも書けない状況が広がっているといえます。家庭のことに踏み込んでの事柄はプライバシー保護の観点から取り扱えないこともあり、全てが絵空事になろうとしているように感じられます。

デジタル機器やアプリの進歩はものすごく早く、回答、調査、文章や絵画まで作成してくれるようです。今後、そのような機器を使う子どもたちが急速に増え、自分と機器の境目が曖昧になっていくでしょう。中学校の技術家庭科では木工など手作りの作業が無くなり、3Dプリンターや作物栽培にAIを使っている授業が次期学習指導要領に組み込まれるようです。

教室の人数は相変わらず多いなかで、タブレットを通してのかかわりで子どもの理解が深まったように感じてしまう危険性があります。一方で教員の仕事への敬遠、退職が多いとのこと。若い教師の子どもへの対応もデジタル的事務が多く、保護者とのかかわりも難しいと聞きます。デジタル機器に頼ることが増えた現状では当然起こりうる問題のように思えます。本音を言い合い、自己表現をすることを大切に、共感あって社会が成り立ってきたのです。これらのことを踏まえて次の点を押さえたいと思います。

- ・一クラスの児童生徒の定員人数の放置が続いている。せめて一教室20数人に。
- ・生活体験が脆弱になり、自然や事物に直接触れる機会が極端に減りつつある。教科の枠を超え、各授業の中で意識的に五感に触れる体験と絡ませる内容を考える。
- ・授業のあり方、指導要領に縛られることなく、子どもたちの実態に即しての柔軟な展開が必要。

〇表現活動としての美術教育

・感情は学習によってこそ育てられます。

美しさや楽しさも生まれながらに感じるものではなく、成長の過程で親や大人、仲間との触れ合いから共感し、伝え合うことで育まれていくものです。体験、実感、感触…などを五感を通すことで感性は豊かに深まるものなのです。感性もまた人と触れ合うことなしには育たないのです。

・図工美術教育は色と形で伝え合う感情の交流を促すことが目的です。

単に物写しの技術や再現技術の向上を目標にしてはいません。図工・美術の表現を「上手、うまい、そっくり」と言った言葉でひとくくりにしないで、表現された造形に込められた作者の感情、気持ちに寄り添い共感し合う視点を創作過程や鑑賞の場に位置づけたいものです。

感情の交流を促す場や機会としての図工・美術の授業のあり方を考えたいものです。

・図工美術教育で大切にしたいこと

手、指を使つての作業、モノとの関り、素材と関り、体感し経験値を増やす。五感を通した感覚と日常の生活を通しての感情を大切に育む…そのようなことを授業の根底に置きたいと思います。幼児の時からスマホが生活の軸になっている今、目と耳、指先で画面を触って分かったように感じてしまう。確かに文字を覚えるのに、数を理解するのにタブレットから流れる画像は興味を引き、子どもたちを夢中にしていきます。文字や数を覚えるのは画像からです。描くでもなく、モノに触れるわけでもなくです。親にとっては危なさはなく、手間もかかりません。この先、もっとこの傾向は広がっていくでしょう。しかし、あえて五感を通した成長をと願うのです。自然との触れ合い、素材に触れ手指を動かして、触覚で感じる…特に幼児期、年少期に体験させたいと思います。図工美術教育以前に子どもの発達、成長に必要なものだと考えます。

・子どもの発達の筋道を考え、目の前にいる子どもたちの成長を見ながら適切な課題や見通しを持って接する。

人の成長には個別差はあるにしろ、発達の順序があります。もちろんその出方は様々ですが、一足飛びに発達するわけでも、その場にずーっととどまっているわけでもありません。この筋道を無視してその場その場の教材や目先だけの内容では教育とはいえません。図工美術教育は覚えたり、早さや正確さと言った目に見える成果が数値でわかるものではありません。人の好み・興味といった感情や内面に立ち入った、これといった正解があるものではないからです。ですからどうしてもわかりやすい評価や相対的な立ち位置を示すために技術の高さを基準にしてしまうようです。この物差しだと誰もが納得させられてしまう現実もあります。客観的な評価を求められれば仕方ないことなのかもしれません。

では、どのような物差しで鑑賞すればよいのでしょうか。少なくとも作品の描写力や再現性の技術だけで評価するのではなく、その作品から感じる作者の思いを汲み取ってほしいのです。作者が対象から何を感じ、どのように描こうとしたのかを読み取ってほしいのです。それは正解がどこかにあるというわけではなく、他との比較でもない、その作品に込められた作者の思いに寄り添うことなのです。

客観的視線が育つ小学校中学年ころからは人の思感を感じながら表現していくということも多くなっていきます。自分の立ち位置や大人の側の要求を感じ、そのような表現をして評価されたいと思うのは自然なことです。中学生以上になれば、なおさらそのような面も強くなるように思います。大人の観点が子どもの感覚を導いているのではと思うことも多いのです。構図や色の使い方など…支援者の一言の重みはあるのですから、個々の表現を支えるアドバイスや指摘は常に検証が必要だと思います。

他人の目を気にすることのない幼児やハンデキャップのある人の絵や表現からの気づきもあるように思います。

・課題の設定も計画的に考えましょう。

図工美術の時間は、教科書に従って進めていくことも多いと思います。その教科書が「造形遊び」を軸にしている、教える側も何が目的なのかわからないことも多いのです。モノを見る目や客観的な視点、感性や個性の育ちを考えずに、無目的、無計画に課題を与えることは図工美術の目的があいまいになり、美術とは何か訳のわからないもの、奇抜な、見栄えや飾り物といった傾向に陥ります。そのことは個々の表現としての発達を見逃すことになるのではと思います。

